

守り継ぐ人たち

下砥川に代々住み続ける人たち、町外から移住してきた家族、愛好会を作った人。砥川獅子を守り継ぐ人の思いを聞きました。



親子三代で共演 3年後、6年後と引き継いで

有馬家の皆さん 前列左から伸明さん、保治さん、一蔵くん、明子さん

益 城町で162年続く有馬家。国登録有形文化財に指定されている蔵の他、門や主屋からもその歴史が見て取れます。

太鼓の練習には参加していた伸明さんでしたが、獅子の練習はしていませんでした。「父も驚いていましたし、私も心配でしたが、親子三代で獅子舞をしているのを見た親戚が本当に喜んでくれて。やってよかったと思いました」と保治さんは話します。

「獅子は山から下りてくる」と言われることから、今年は地区の高台にある有馬家で立ちが行われました。有馬家6代目の伸明さんと息子の保治さんが獅子、保治さんの妻・明子さんが笛、孫の一蔵くんが花棒として参加。親子の共演を見ようと、県内外から有馬家の一族が集結しました。

今回は一蔵くんのお世話もあり、7月から練習した笛を披露する機会が少なかった明子さん。「今回は笛を吹く余裕がなくても、3年後、6年後には役に立つかもしれないと思い、練習を頑張りました」と朗らかな笑顔を見せました。「準備や練習を含め、全てを引き継いでいかないとすね」と保治さんも続けます。次代を担う有馬家の二人は、しっかりと先を見据えています。



新天地での挑戦 人の温かさに包まれて

移住家族 毛利明莉さん、日乃花ちゃん、隆宏さん

令 和7年3月に移住したばかりの毛利さん。大工の隆宏さんがマイホームを建てるために選んだのが下砥川でした。7月の初顔合わせで「これを機に地域に入っていければ」と話していた明莉さん。明莉さんが七五三の時に着た着物を生かし、装身具は2カ月かけて作りました。



左から／七五三と異なる着付けに奮闘する明莉さん／お化粧に挑戦／付けすぎちゃった！



福馬則幸さん

先人から守り継いだ獅子が未来へつながることを願って

あれは忘れもしない昭和55年。私が妻と結婚し、そして「砥川獅子愛好会※」を発足した年です。

親子5代で関わってきたこの獅子舞は、約400年続く伝統行事ですが、当時は他の地区と同様、存続の危機にひんしていました。そこで私が地元の若手に声を掛けたところ、30人以上もの仲間が集まり、愛好会としての活動が始まりました。

当時はがむしゃらでした。夏祭り、子ども会、老人ホームへの慰問、ホテルのイベントなど、要請があればどこへでも赴き、獅子舞の魅力を伝えて回りました。打ち上げでは、仲間たちが予算を気にせず浴びるように酒を飲むので、会計を預かる身としては頭が痛かったですが、それも今となっては最高の思い出です。

そして今年、祭りには多くの新しい住民の方々も参加してくれました。その光景を目の当たりにし、今は亡き恩師たちや仲間たちと共に、この伝統を守り継いできて本当に良かったと、心から思います。

※現在は砥川獅子舞保存会

福馬さんが書いた
笛と太鼓の楽譜

